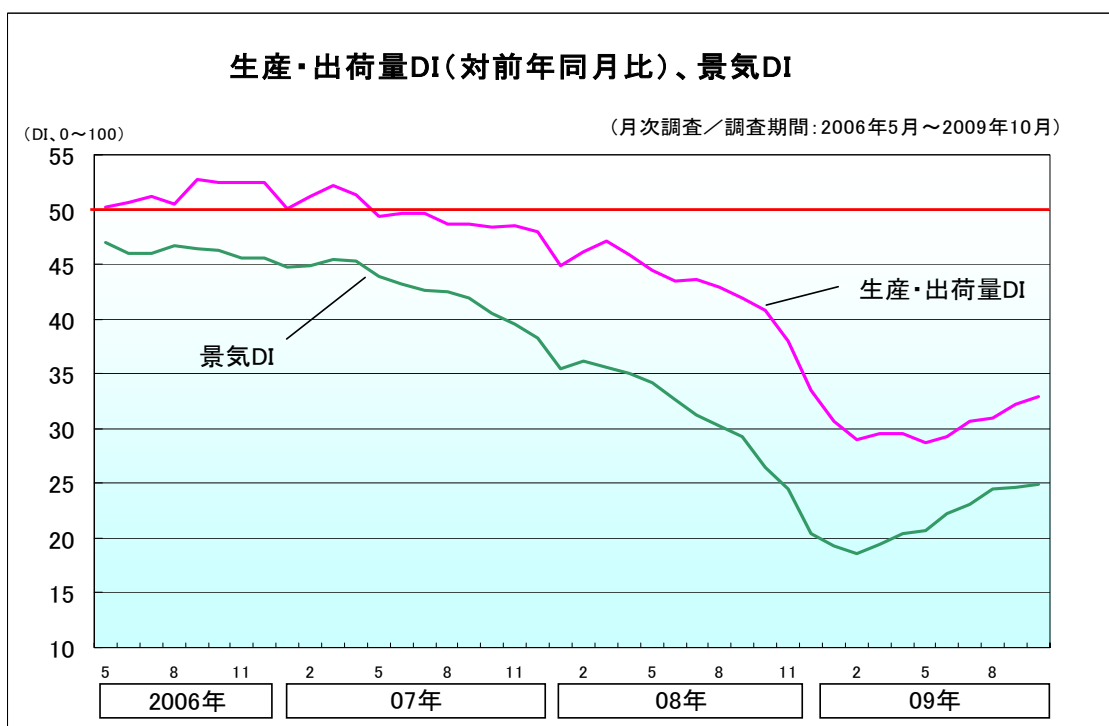


生産・出荷量DIの見方〔生産・出荷量DI〕

- ・生産・出荷量DIとは生産・出荷量を前年同月と比較して指数化した指標
- ・生産・出荷量DIは2009年5月を底に改善傾向
- ・鉱工業生産指数は2009年2月を底に改善傾向
- ・生産・出荷量DIは網羅性、速報性が高い

生産・出荷量DIとは、調査先企業に生産・出荷量の前年同月との増減を「非常に増加した」から「非常に減少した」までの7段階で回答してもらい、0～100で表した指標である。50が判断の分かれ目となり、50より水準が高ければ生産・出荷量は前年同月より増加、低ければ減少していることを表す。



生産・出荷量DIの動きをみると、2006年5月から2007年4月までは判断の分かれ目である50を上回り、生産・出荷量は増加していた。その後、サブプライム問題による外需の失速に加え、原油・素材価格高騰により企業の収益環境が悪化したことや、生活必需品の値上げによる消費マインドの低下で内需も低迷したことなどから、減少傾向となった。その後、リーマン・ショックを発端として金融危機がさらに拡大したことによる輸出不振や消費不振で2008年秋から急速に悪化した。2009年5月以降は、中国をはじめとする外需の復調やエコカー減税、エコ・ポイント制度など政策的な消費刺激策などにより改善傾向にある。

景気DIと比べると、景気DIと生産・出荷量DIは類似した動きをしているものの、生産・出荷量DIの方が、底打ちが遅く回復は遅い。景気DIは2002年5月の調査開始

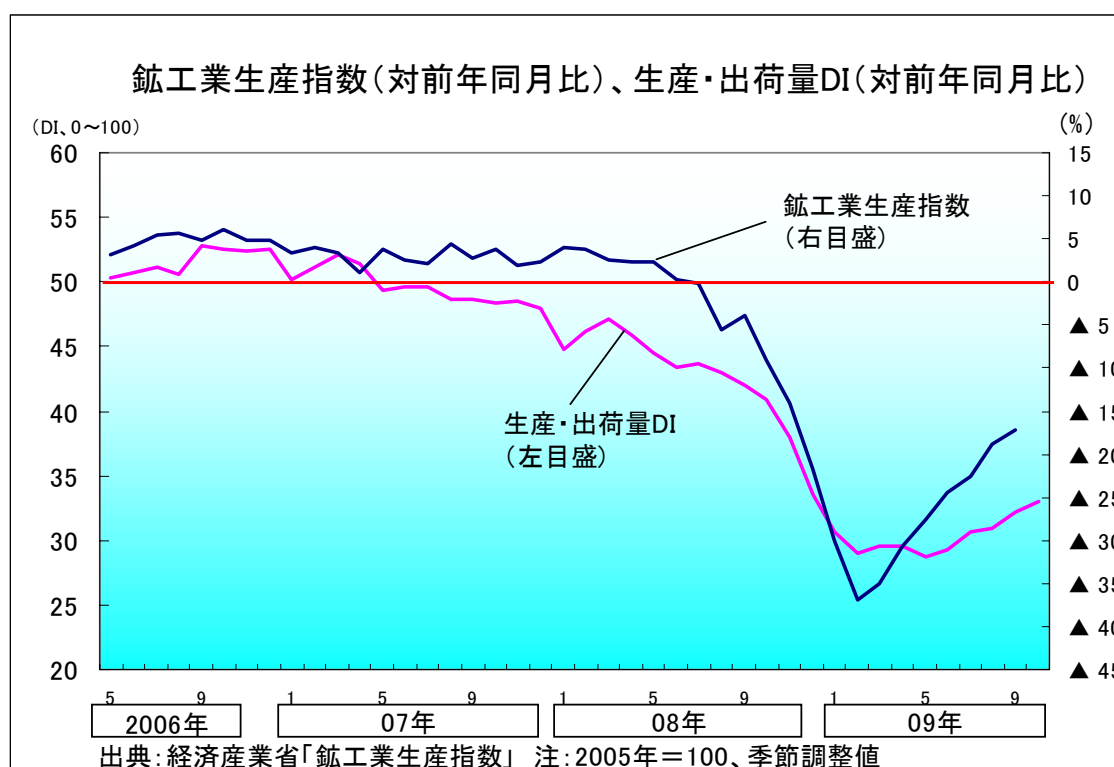
当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および無断引用を固く禁じます。

DI 分析レポート

TDB 景気動向調査 (URL : <http://tdb-di.com/>)

以来、判断の分かれ目となる 50 を超えたことはなく、2006 年春頃から DI の水準が前月より悪化する傾向にあったが、2009 年 2 月を底に改善傾向にある。

生産の動きをみる代表的な指標には鉱工業生産指数がある。鉱工業生産指数とは、基準年を 100 として鉱業と製造業の生産量を指数化し、企業の生産活動の状況を表す指標である。景気が良いと販売量が増加し、企業が製品を増産するため、指数は上昇する。景気が悪化すると販売量が減少するため、出荷の減少、在庫の増加局面を経て生産が減少し、指数は低下する。



鉱工業生産指数の前年同月比の動きをみると、2008 年 7 月から前年同月を下回り、2009 年 2 月を底に悪化幅は縮小傾向にある。9 月の鉱工業生産指数は前年同月比 17.3%減の 85.7 となった。

鉱工業生産指数と生産・出荷量 DI を比較すると、鉱工業生産指数は 2009 年 2 月を底に改善しているが、生産・出荷量 DI は 3 月に改善したものの、4、5 月は悪化し、5 月に過去最低を更新した。これは新型インフルエンザにより飲食店や旅館・ホテル、それに関連する業種などが悪化したためと考えられる。鉱工業生産指数は鉱業と製造業を対象としているが、生産・出荷量 DI は小売業やサービス業など鉱業や製造業以外の業界も含まれているため、このような違いがある。

生産・出荷量は中国などの新興国を中心とした外需の復調や政策的な消費刺激策によって改善しているものの、雇用不安や所得の悪化による消費の低迷、補正予算の見直し

DI 分析レポートTDB 景気動向調査（URL：<http://tdb-di.com/>）

などにより先行きは不透明である。生産・出荷量 DI は景気を判断するのに重要な生産・出荷量の増減について、幅広い業界のデータがあり網羅性が高く、日本経済全体の生産・出荷量がわかることや、業界ごとの比較がしやすい。また、調査結果が翌月の第 3 営業日に発表されるなど速報性も高いため、経済活動をいち早くとらえられる有用な指標となっている。

(産業調査部 経済動向研究チーム K. S)